

法華經にみる經典読誦の意義

吉木祥介

1、発表の概要

発表者は2010年度に、山口県山口市にある山口県立大学大学院国際文化学研究科に、修士論文「法華經にみる經典読誦の意義」（以下、「本研究」と呼称）を提出した。今回の発表では、本研究の内容に基づいて説明させていただく。

2、研究の動機と目的

発表者は山口市にある日蓮宗常妙寺住職の息子として生まれ、市内の高校を卒業後、立正大学仏教学部宗学科に進学し、その後に日蓮宗の僧侶となった。僧侶として活動する中で感じることは、「僧侶には様々な儀礼を行うことが求められている」ということである。

発表者が日蓮宗の僧侶として儀礼を行う際、どのような儀礼であったとしても、読経は欠かさずに行ってきた。仮に、依頼された儀礼を読経無しに終えたとするならば、依頼者が不満を抱くことは想像に容易い。依頼者側にとっても読経は当然行われるべき行為として存在しており、儀礼と読経は切っても切れない関係にあるといえる。

中村 [1975] 1258によると、書かれた聖典の読誦は西暦紀元後に一般的に行うようになったとあり、仏教史においては伝統的に行われてきたことが分かる。仏教は仏・法・僧という三宝に帰依することを説き¹⁾、その三宝の一つである法を読誦することは当然のこのように思える。この読経に対して仏教徒はどのような意図や意識を持っていたのであろうか。

ここで日蓮宗事典刊行委員会 [1981] を見てみたい。日蓮宗が発行するこの事